

アトモスフィア

黒い汗の教え

脊山 洋右*

東京大学大学院医学系研究科

皮膚科の先生からシャーレに入った黒い垢の分析を依頼されたのは20年も前のことである。患者は八王子医療刑務所に服役中の受刑者で、筋骨隆々たる、いかにも健康そうに見える男性だという。ただ全身に黒い汗をかくので、珍しい病気として矯正医学会に症例報告をすることにしたら、汗を生化学的に分析してほしいということであった。

臨床的には色汗症の範疇に入るが、真黒な汗の報告はこれまでになかったので、我が国はもとより世界でも初めての症例ということで、刑務所の医官だけでなく大学病院からも皮膚科の先生が往診に出向いて試料を採取してきたとのことであった。

生体から得られた黒い色素なのでメラニンの系統かなと思いつつ、メタノールに溶かしてみると意外にすんなりと溶けてしまった。そこで薄層クロマトグラフィーで分析することにした。展開槽の中で溶媒があがって行くにつれて、原点では黒かった色素がなんと鮮やかな3色に分かれてしまったのである。

数人の医師が診察を重ね、奇病として学会にまで報告しようと思った黒い汗が、実は人工的な色素を混ぜ合わせたものだったのである。医学者が受刑者にだまされていたわけであるが、この次第が文字通り一目瞭然となった瞬間であった。

問いつめてみると、この受刑者は上申書を出す際に渡されるカーボン紙を巧妙に隠し持っていて、これを塗らたくっては黒い汗をかいたと称していたのである。受刑者の写真を見ると、確かに手の届く範囲だけが黒かったことも合点がいった。

カーボン紙は以前はカーボン色素として用いていたが、現在の色素は混合色素であることから薄層クロマトグラフィーで真実が暴かれてしまったのである。

この症例に携わった複数の医師達は長年にわたって医学を勉強してきたし、色汗症についても改めて教科書を見直した上で、世界最初の症例だと考えて学会の抄録を書いたのである。一方、患者を演じた受刑者は中学校を卒業しただけで、医学の医の字も知らないし、ましてや色汗症という疾患についての知識があったわけでもない。ただ、カーボン紙を体に塗って見たところ医官が珍しがり、医療刑務所に移されて、監視付きとはいえ時には外部の一般病院にも転院させてもらって、実に良い待遇を受けたものだから、その後もだまし続けていたのである。ちなみにこの受刑者は詐欺罪で服役していたとのことであるから、医者をだますくらいは簡単なことだったのであろう。この演題はプログラムには載ったが、上記の真実が明らかになったので学会での発表は取消になったと聞いている。

これは科学者が詐欺師にだまされかけたものを科学的な分析によって阻止した例である。逆に科学者が世の中を欺くようなことをしてはならないのは言うまでもないことである。新しい学説として一時的に注目を浴びることがあったとしても、何時かは矛盾が明らかになって立ちゆかなくなるものである。常に客観的な実験的検証を積み重ねて、真実を追い求めていくよう心がけたい。

*本会副会長